

令和5年度第1回多治見市総合教育会議 議事録

(要点筆記)

日 時：令和5年11月29日（水）午後4時00分 ～ 午後5時15分

場 所：多治見市役所駅北庁舎4階第3会議室

出席者：【会議構成員】

多治見市長	高木貴行
教育長	仙石浩之
教育委員（職務代理者）	大嶽和好
教育委員	木下貴子
教育委員	鈴木亜紀子
教育委員	水野 豊

【事務局】

《教育委員会》

熊崎副教育長、東山教育次長、丸山教育指導監、杉村教育総務課長、久野教育研究所長、大竹食育推進課長、伊藤福祉部課長（放課後児童健全育成調整担当）、南谷課長代理（教育推進課）、小久保課長代理（教育総務課）、市川総括主査（教育総務課）、古川指導主事（教育相談室）、水野課長代理（食育推進課）、坂崎主査（教育総務課）

《市長部局》

皆元企画防災課長

《校長会》

高橋校長会長（養正小学校長）

【招聘者】

東濃教育事務所 教育支援課 学校地域連携係課長補佐兼係長 吉村彰夫

1 市長挨拶

就任して初めての総合教育会議だが、私自身が現場に口を出すということではなく、教育環境の充実と方針の方向性をしっかり示していくことが私の役割と考える。それを教育長を含め教育委員会の皆さんが意思疎通をして、さらに子ども達の未来に向け施策を打つという方針は変わらない。近年、多様性や価値観の違いなどいろいろと子どもを取り巻く環境においても正解が1つだけではなくなっていると感じる。1+1=2というのは学問のことで、子どもの教育ではいろいろな答えがあり、いろいろな課題においていろいろな方式があると思っているので、そういう部分をいろいろな立場の皆さんが子どものためを思って考えていくのが総合教育会議だと思う。そのため、来年からは私の方針で総合教育会議を年1回ではなく2回は開催したい。1回は子どもをとりま

く問題・課題に対してしっかりと取り組み、今回は不登校というテーマについてしっかりと皆さんと議論していきたい。もう1回は未来の子ども達にどう育ってほしいか、いろいろな部分でチャレンジしてくれるような環境についてなど前向きな会議を行ってきたい。今年は東濃教育事務所から吉村さんに来ていただいて今県として行っているいろいろな教育支援を考慮し、勉強させていただきながら知見を深めていきたい。不登校になる要因について対策や人数等を含め細かく出していただいている。

トライ&エラーという言葉があるが、子ども達に対してエラーはできないのでトライ&チャレンジと私は考える。教育行政においてもチャレンジしながら子どものために何がいいのかを真摯になって考えていきたい。そういう意味では教育委員の皆さんは民間の立場からお持ちの知見を十二分に発揮していただきたい。また教育委員会のみならず各部署の皆さんにも集まってもらいながら議論を深め子ども達の環境を整えていくことを考えている。1つの答えが導かれることがない会議になるが皆さんと少しずつ紐解きながら未来につながる子ども達の教育行政に皆さんと一緒に進んでいくつもりなので今日の会議も含めてご意見をいただけるとありがたい。

2 教育長挨拶

昨年度までは総合教育会議は年1回であった。多治見市の場合、市長と教育委員会が日常的に意見交換をしているので敢えて総合教育会議は回数を重ねなくてもいいのではないかという認識があった。今回新市長が誕生し、市長から総合教育会議の回数を増やして意見交換の場をきちんと担保していくというご意見をいただいた。私もその意見には大賛成である。今回は不登校について、マスコミでも取り上げられ多治見市においても最近急激に増えてきているこの問題をテーマと決めて準備してきた。来年以降も市長と意見交換を行いながら、テーマも議論しながら最低でも年2回、場合によってはそれ以上自由な意見交換の場を作っていきたい。

数年前に比べて学校現場はタブレットが入り授業の風景が一変し、不登校に対する認識についても学校現場を含めて変わった。以前は最終ゴールが学校に戻すことだったが今は社会へ巣立った時に自立していくというのが最終目標なので、不登校自体も問題行動ととらえるのではなく一人一人きめこまやかなことが必要じゃないかという雰囲気になっている。数年単位でいろいろな面が変わってきていると実感している。私自身が勉強する機会と捉え活発な意見交換ができればと思う。

3 議題

(1) 不登校について

- ① 東濃教育事務所教育支援課学校地域連携係課長補佐兼係長 吉村彰夫氏 説明
- ② 教育相談室 古川指導主事 説明

【市長】

不登校の要因について無気力・不安の割合が90%、もう少し精査する必要があるといわれたが県のスタンスはもう少し細かく調べていくのか。

【吉村】

全国で行われている問題行動調査の質問そのものに対して、無気力・不安は抽象的とする意見が挙がっている。今後もう少し細分化される可能性がある。各市町村では1人1人の家庭状況や理由をきちっと見つめていくことが必要。県としては把握しきれていないが、各学校ではその学校に在籍する子ども達の状況をきちんと詳細につかんでいると思う。

【市長】

瑞浪市は不登校に対して「学校へ行かなくていいよ」というスタンスに急遽変えた印象であるが、どのような経緯か把握しているか。

【吉村】

その経緯については把握していない。

【市長】

当市にとっても非常に課題。教育委員会の皆さんと一緒にあってさわらび学級を含めたあり方を検討していかねばならない。とはいえ、学校の先生たちは学校へ行くことを前提として学校運営を行っているので、「学校へ行かなくていいよ」というスタンスもやりにくい。なぜ瑞浪市は方針を転換したのか、何がきっかけだったのか。もう1つは魅力ある学校づくりの推進について、子ども達に寄り添えば寄り添うほど先生たちが多忙化していくが、県としても魅力ある学校づくりのアイデアはあるか。

【吉村】

学校長が考えている学校経営構想を尊重することも大事。魅力ある学校づくり・特色ある学校づくり、そしてどの子どもにも居場所となるような学校づくりをしてくださいと強く求めているが、それを実現する部分については学校長が決めていくこととなる。

【市長】

フリースクールについて県議の頃から関わってきた。学校へ復帰という部分と子ども達の居場所づくりというのは天秤にかけると相反するところも若干あると思うが、2年くらい前から県がフリースクールについて寛容になってきたと感じている。いろいろなフリースクールがあり、TVだけ見せているところもあれば子ども達の自主性を尊重して一緒に活動するところもあるということが印象に残っている。今後県としてフリースクールの認定は課題となると思うがその位置付けはどうか。

【吉村】

一昨日は県の義務教育課担当も同行して視察をしている。東濃地区のフリースクールの現状としては、子ども達の一つの行き場所として、子ども達が笑顔で過ごしている現状があるのでそこはありがたいし大事なことと考える。連携は大事にしていかなければならない。一方で法律にある教育を受けさせる義務や義務教育をきちんと受けなければならぬ中で、学校かフリースクールどちらか一方だけに決めなければいけないという決め事があるのは課題点である。併用できたり連携をとりながら行きたいところにどちらも行けるような仕組みになるといい。花咲学園は瀬戸のフリースクールをモデルに立ち上げられ、基本理念は「よりよいひとり立ち」という中津川市の教育ビジョンとまったく同じ。教科学習は教えられないがそれ以外の理念は市と共通点がたくさんあって連携はとりやすいが、フリースクールへ行くなれば学校へは行かないという約束事があることが課題。

文科省が出したココロプランにおいても 60 万人の不登校を解消するためにはとにかく連携を図るべきとしており岐阜県もしっかり受けて、寛容的にしていこうという考え方は伝わってくる。

【水野委員】

私は退職した教員であり、陶芸を通じてさわらびに関わっている。12月の初めに干支作りをしながら子ども達と触れ合ったが、無気力さは感じなかった。染色やたこづくりを教える人もいて、子ども達からはじっくり取り組む姿勢が見られる。居場所づくりが外部の応援を含めこれから大事になってくる。笠原だと小中学校が併設となり地域の人が入り出すスペースを作るようお願いしている。教室でちょっとうまくいかなかった子が地域の人と雑談しながら少しでも気分がほぐれるといいと思う。学校だけで抱え込むのではなく、いろいろな人が関わりながら子どもを育てていくという視点を持つことが大事かなと思いながら子ども達と接している。

【木下委員】

時代の流れとして私たちの頃はいつも学校へ行くべきということがあったり、親が行かせないのも問題だと責められるときもあった。法律が変わって行かせないことは問題ではないとなり、全体の方向はそちらに向かっていると思っているが、一方で学校でしかできない教育もあってフリースクールでいいというのも難しいところだが、ある程度多様な学びの場を認めてほしいと思う。それぞれの子どもが多様な学びをしながら連携できる方向になってもいいかなと思う。何で学校へ行かなければならないかを考えたことはなかったが、そもそも学校へ行かなければならないかを考える時代となってきている。学びの場を確保することが最終的な目的だと思うので、子ども達にとって学びやすい場から入って学校も魅力ある学校として行きたくなるような連携をもつ。学校だけで全部やるのは大変なので水野委員や古川指導主事が言っていたように他の人たちの手を借りながら抽象的だけどやっていただくのが大事だと思う。

【大嶽委員】

先程のところに戻るが不登校の分析の要因に関することは無気力が90%、多治見市の調査でも中学校で59%、小学校で75%という数字が出ている。調査することでぼやけてしまうこと、はっきりしないことが出てくるが、この調査は不登校の状態になっている子ども自身が答えるのか。

【吉村】

学校の担当職員、多くは生徒指導主事や教育相談担当が答えている。

【大嶽委員】

もし子どもが答えるなら自分自身を把握したり自分自身の様子を表現する言葉がないのでこういうこともありうるが、選択肢を分析・活用できる形に変えていくのもありだと思う。もう少し実効性のある形の選択肢を考える調査をするいい時期だと思う。

【副教育長】

さきほど古川指導主事が説明したさわらび学級を学校復帰だけを目的とするのではなく居場所とする取り組みの現状はどのようなか。

【古川指導主事】

今現在、適応指導を行うことによって在籍する学校への復帰を図るということが規約にあるが、子どもの居場所として行かせてほしいというニーズが高まっているので受け入れている状況。規約改正を早急に対応していく必要があると思っている。

【鈴木委員】

未然防止が大事というのは皆さんの共通の認識。学校教育が目指しているものが全員で〇〇するということだと、それができない子は十字架を背負うことになる。皆勤賞を表彰する制度があるが、全部学校へ行くのは偉いが自分の調子に合わせて休むのも偉いと思う。体調を見て休むのもそうだが精神的なところでも休めるという最後の逃げ場があると子ども達が安心できる。長期化したら戻るのが大変になるが1日だったら心の余裕になってまた戻れると思う。保護者も子どもが精神で休む時に「ちょっと熱が」と電話するより「今日は精神の安定のために休みます。次の日から学校へ行きます」と正直に言えれば気持ちも楽なのでは。

【副教育長】

学校の現場ではどのようなか、実際のところを校長会代表の高橋校長先生から説明をお願いします。

【高橋校長会長（養正小学校長）】

先ほどの資料をみても小1の不登校が多い。幼稚園の教育長訪問へできるだけ職員も行って、幼稚園でどういう保育がされているのかを見て小学校へ円滑につなげたい。低学年の先生がしつけとして学習規律を教えて安心して生活できるようにするというで一斉の指導が多いが、そういう時代でないということは学校現場も学校長も知っている。スタートの1年生でまず楽しく通えるようにすることが保護者も安心して小学校生活をスタートできるので、小学校低学年を大事にしたいと思っている。さわらびについては担任にとって学校へ復帰させるための機関という認識ではない。1番は市長も言われたが学校へ行かなくてもいいんだよというメッセージが至る所から発信され、それをどうキャッチしているのか。保護者も自分の子が登校を渋ったときに行かなくていいという流れの中で自信をもって声掛けができない方が結構みえる。中にはやることがないつまらないのでゲームにはまるという現状があり、学校は生活のリズムを改善できるように担任が「朝起きられるようになったかな？」という声掛けをしている。その子が自分で歩き出すようになるには大人の支えが必要だが、現場のほうも「来た方がいい」というのも言いづらい時代となり、保護者も同じ状況。何をしたいのかわからないが時間だけが過ぎていく。学校に来られるようすることが責任だと思っている職員が多いのも事実。さわらびでも長続きをしない子もいるので、オンラインの活用など多様な受け皿が求められている。

【教育長】

以前であれば誰かを悪者にする議論が横行していたと思う。たとえば親が悪い、学校、教育方針が悪いとか本人の根性がないとか。今は誰かを悪者にするのではなく、意見の違いはあると思うがもっと構造的な部分で一人一人を大切にしていこうとかそういった議論になっている。すぐに解決できる問題ではないが、議論自体はいい形で行われるのではないかという印象を強く持っている。今のさわらびのスタッフが無理やり学校に戻すようなことをやっているかというところではない。居場所としての機能を果たせるように一生懸命やっている。法律的な枠組みもあって適応指導教室といっている。これは逆に時代に合わない部分もあってそういうことも含めて見直していく。枠組み自体を見直す必要があるというのが教育委員会内部で議論されている。また、SSW、ほほえみ相談員など教員以外のスタッフを充実させたために担任が自分の責任が軽くなったと錯覚していないかという問題提起もある。私が見る限り先生方は学校ぐるみでチームとして一生懸命取り組んでいただいている。心のスキが生まれているとしたら改善しなければいけないということで問題提起していただいたものと認識している。今日結論は出ないが問題の本質が各委員から含まれる発言だったと思う。

【大嶽委員】

中学1年生で新規40人という大きい数字が出ている。中1ギャップといわれているが要因についてお考えがあればお聞かせ願いたい。

【古川指導主事】

確かに中1ギャップとずいぶん言われて、小学校から中学校への転換でおおきなつまずきを感じる生徒は多い。そこは引き継ぎを丁寧にするということで取り組みを強化している。最近の傾向としては中1から中2の不登校者数が多い。中1で手厚くしてきた半面、学習で中1から中2にかけて膨らんできている。ケアしていると別のところがみえてくる。例年変わってくると思うが今年はそういう傾向がある。

3 議題（2）多治見市教育大綱について（事務局 小久保課長代理説明）

【教育長】

多治見市は教育大綱を0から独自で持つのではなく、総合計画があるのでその教育部分を抜き出して教育大綱としている。現在、第8次総合計画を議論して12月議会で承認される予定。承認されれば来年4月からこの教育大綱が動き出すことになり、そういう意味の提案で確定ではない。なにかあればご指摘いただきたい。

【皆元企画防災課長】

本日10時から総合計画の会議があり、質疑等行われ、評決も行われた。全員出席で全会一致での可決となり、あとは議会の待つのみ。

【副教育長】

本日の議題は以上ですべて終了となる。

これを持って、令和5年度第1回総合教育会議を閉会する。

以上